

随筆

中国鎮江駐在記

関口 秀樹

1. はじめに

私は、2011年6月から2016年3月までKYB Hydraulics Industry (Zhenjiang) Ltd. (以下KHIZ) に、2016年4月から2017年5月まではKYB Industrial Machinery (Zhenjiang) Ltd.(以下KIMZ)へ駐在した。約6年間を振り返り、駐在生活で経験した一部を紹介する。KIMZとKHIZは、共に中国の江蘇省「鎮江」市にあり、2016年に2拠点は合併し新KIMZとなり、オートモーティブコンポーネンツ（以下AC）事業とハイドロリックコンポーネンツ（以下HC）事業の両製品を生産している海外で唯一の工場である。



写真1 鎮江鍋蓋面

2. 鎮江市について

鎮江市は、上海から西へ約300kmに位置し、人口は約300万人、住んでいる日本人（駐在含む）は50人にも満たない。したがって、街に出てもまず日本人に会うことはありません。馴染んでしまったせいか、街ではよく現地の人に道を聞かれることが多かった。特産は、芳醇な香りとコクのある味わいの「黒酢」が世界的にも有名である。黒酢工場で働いている人は、風邪をひかないといわれるくらい、健康に良いらしい。街に入ると、黒酢の香りが漂っている所もある。また、麵文化が発達しており、朝食で鎮江鍋蓋面（写真1）を食べる人が多い。友好都市は、ドイツのマンハイム、韓国の全羅北益山市、日本の倉敷市と津市である。駐在中には、倉敷市との友好都市交流会があり、日系企業として招待された。市内には京口三山と言われる、金山、北固山、焦山があり、その中でも北固山は、三国志時代の蜀の劉備と呉の孫尚香（孫権の妹）が見合いをした舞台としても有名である。歴史好きの人にはたまらないのではないのでしょうか。西津度（写真2）は、瓦で積み上げられた街並みを見ながら散策し、風情を楽しむことができるため、全国からの多くの観光客が訪れている。ライトアップされた夜の西津度も素晴らしい。

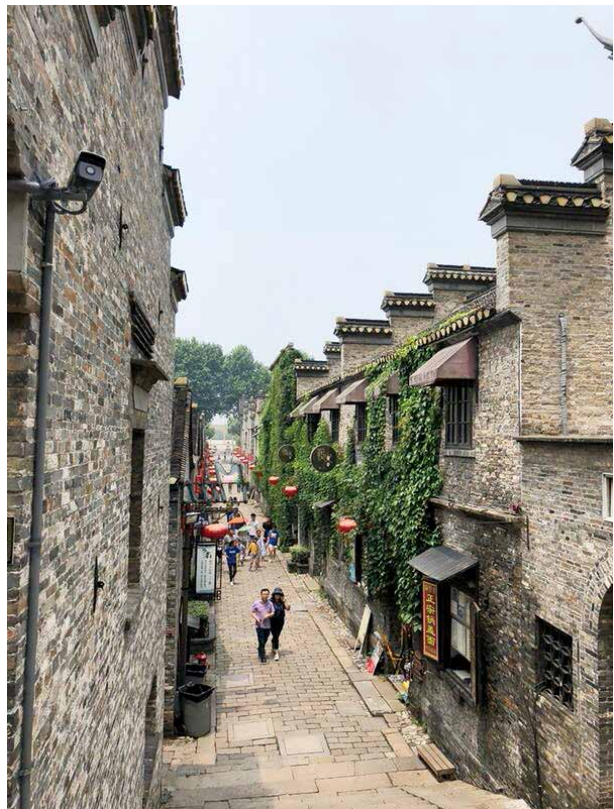


写真2 西津度

3. 交通機関の発展

交通機関は、飛行機、車、バス以外では、中国全土に高速鉄道網が広がっており、交通渋滞に巻き込まれることなく、遠距離移動には非常に便利である。しかし、外国人は、切符を買うときに苦勞する。昔は、駅の自動販売機で購入できた。駅員と会話をすることなく、画面からタッチパネル方式で買えたため、非常に便利であったが、現在は諸事情により、外国人は窓口もしくは、携帯電話予約でしか購入できない。外国人が窓口で購入するには、2通りの方法がある。①言葉が話せない場合には、事前に行先を紙に書いておき、窓口にて無言で駅員に差し出す。質問を受けても、駅員が処理をしてくれるまで、必死な形相でひたすら紙を指さす。②多少会話に自信がある場合には、晴れて挑戦できるのだが、発音がうまくないと聴き取ってもらえず、何度も言い直すことがある。このようにして、何とか購入できる。そういうこともあってか、数年前に大きな駅には外国人用の窓口が設けられ、英語対応も可能になるなど改善されている。

また、全国的に電動バイクが普及しており、利用者は非常に多い。音もなく速い速度で接近してくるので、歩行者は気を付けないと危険である。鎮江市内には近場の移動手段としてタクシーの代わりに使える便利な電動三輪車があったが、数年前に政策的に廃止された。

ここ数年は、スマートフォンで開錠できる乗り捨て自由のシェアサイクル（自転車）が市内の至るところでみられるなど新しいサービスが次々と展開されている。

4. 言葉について

世界各国地域ごとに方言があるように、鎮江にも方言がある。通常一般に勉強をする標準語とは、発音が異なるため、街や従業員同士の会話を聞くと別の国にいるかのような感覚になる。初めは、鎮江駅からホテルまでのタクシー移動も大変であった。私の標準語の発音もおかしかったのもあるかもしれないが、運転手に「言っていることがわからない」と言われ、当時覚えたての鎮江方言でホテル名を伝えようと、何事もなかったかのように送ってもらったのを覚えている。その後は、雑談しながら目的地に向かうことも多くなりました。

電子辞書、携帯の翻訳ツールなどを駆使し、ある程度会話ができるようになるまでは、必死でした。現地で強制的に話さざるをえない環境に身を置いた方が、必然性からされるため、語学力は、早く身に

つくことが実感できるが、鎮江では、基本的に日本語は通じず、英語もほとんど通じないため、生活上最低限の基本会話、単語、数字、単位は事前にマスターしておいた方が良い。

5. 食文化について

人が生きるために「食」はとても重要である。駐在中は「食」を楽しんだ。朝食は、お腹にやさしい粥、ワンタンなどの軽めのもの、皆さんがご存知の饅頭類（肉まん、野菜まん、小籠包など）は、どれも中身がジューシーである。当然、麺類も外せない。ただし、ほとんどのお店で麺の量が多いので食べ過ぎには要注意である。オプションで卵焼きを付けたり、好きなだけ生姜、香菜、漬物等々トッピングできるので、つつい山盛りになってしまう。

煎餅（Jianbing）（写真3）と呼ばれ、ソーセージや野菜、海藻、卵など好きな具材と店ごとの謎の特色ソース（これが非常に良い味を出している）をクレープ状の生地包んだものがある。注文してすぐに熱々のものができ、多くの人々に好まれているようだ。個人的には、通常の具材と揚げパンを挟んでもらったものが、食べごたえありで、お気に入りである。機会があったら、ぜひお試しを。



写真3 煎餅

次に紹介するのは、中国の何処でも食べられ、万人に好まれている「火鍋」（写真4）という料理である。野菜、肉、海鮮類、練り物など様々な食材から選び、鍋でしゃぶしゃぶして、自分で作った「つけだれ」に浸けて食べる。また、辛さのレベルを選ぶことができる。写真4は、本場の四川省の火鍋で、辛さレベルが一番下の「微辛」でも、正直言って、辛い。四川系は、唐辛子の「辛さ」と山椒の「痺れ」

が混ざった「麻辣味」が特色で、食べた直後に汗がどっと噴き出すが、汗を拭きながら食すのもとても爽快。病み付きになる料理のひとつである。



写真4 四川火鍋

また、夜の屋台も忘れてはいけない。炒飯、焼きそば、串焼き、なんでもある。寝る直前まで至福の時間を過ごせるが、その代償として、体重が右肩上がりで増えていき、最悪はスーツ、作業着を破いてしまう場合がある。経験者からのアドバイスとして、駐在される方はお気を付け願いたい。

6. 歴史

4,000年の歴史といわれる中国には、世界的にも有名な万里の長城、西安の兵馬俑など史跡が数多く残っている。その中でも「三国志」の史跡を訪れてみました。三国志は、学生時代に何度も読んだ歴史物で、想像を膨らませながら見るのができた。どの史跡も規模の大きさに圧倒される。写真5は、蜀の武将「張飛」が治めていた重慶にある古城に保存されていたものである。

次に、鎮江から電車とバスで乗り継いで約8時間、湖南省にある「嵩山少林寺」(写真6)も訪れた。1982年に公開されたハリウッドスターのジェットリー主演の映画「少林寺」で少林武術は、一躍有名になった。少林寺では、全寮制武術学校が多くあり、多くの生徒が武術修行をしていた。また、夜には自然の山々を舞台に屋外で行われる少林武術ショーは、ライトアップ、音響効果も迫力があり、圧巻であった。

中国では、小さなお店がたくさん集まったお城のような建物をよく見かける。重慶の商業城(写真7)は、映画のワンシーンのように、夜は黄金色に輝いていた。

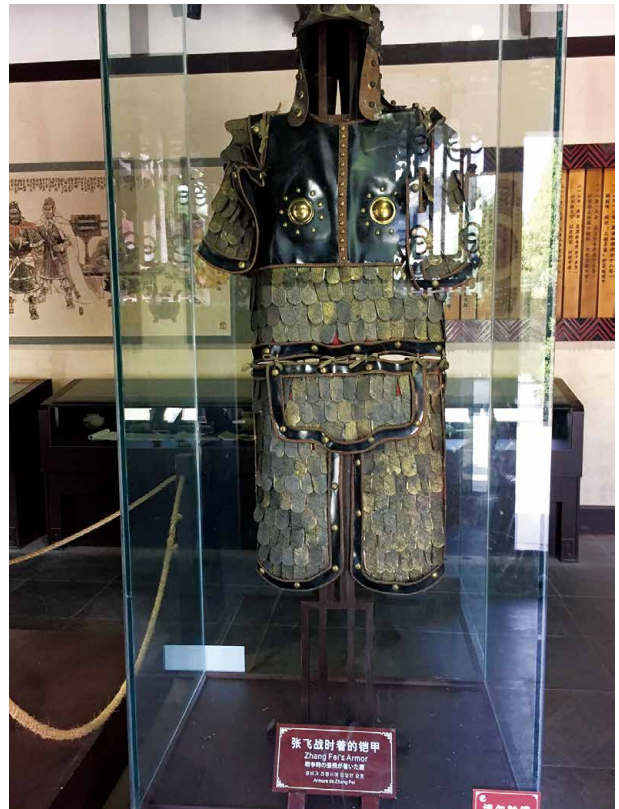


写真5 蜀の武将「張飛」の甲冑

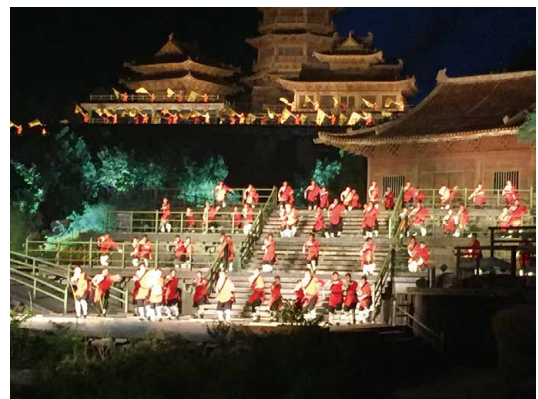


写真6 嵩山少林寺



写真7 黄金に輝く重慶の商業城

7. 中国での業務

HC事業の海外生産工場であったKHIZは、2004年から岐阜南・東工場と同じ建設機械用シリンダの生産をしており、2011年には相模工場の20t系ショベル用の走行モータを一部中国移管した。これに伴って駐在することになった。最初の業務は、移管までに部品の現地調達化を進めることと、移管後に安定的量産ができるように部品の安定供給を図ることであった。また、KHIZに原価企画部門を立ち上げ、日本の工場経営に近づけるように試行錯誤しながら活動した。さらに相模工場のミニショベル用走行モータおよび旋回モータの中国移管も経験できた。その後2016年頃までは、世界的な経済不況の影響もあり、中国市場も厳しい状況が続き、どん底の時代を耐え、2016年4月にはKIMZと合併し、新たな体制の下、歩んできたことが記憶に残っている。KIMZに少しでも力になればと、言葉の壁、ニュアンスの違いなどで苦勞もしつつ、現地の方々と何度もやり取りをしながら、これまでやってきた。

8. おわりに

2016年は、中国市場は政策変革や中国を中心とした一帯一路の動きから徐々に景気が回復し始めた、世界経済の好調も重なり、生産も忙しくなり始め、2017年6月に日本帰任となった。振り返ってみれば、駐在の6年は、あっという間で、つらい時も楽しい時も多々あったが、濃厚な時間を過ごせたと思う。特に海外駐在では、自部署の範囲外業務や、様々な面での判断と責任を求められる機会が多いため、苦勞もしたが、緊張感を持って仕事をするのができ、非常にやりがいがあった。これまでお客様、取引先の方々、現地従業員、日本や他拠点の方々、拠点長や同じ駐在員など多くの方々から支援を受けたおかげで様々な問題も一緒に解決できた。この場をお借りしてお礼を申し上げます。現在、海外駐在の方々、これから駐在される方々は、健康に留意され、ストレスを上手に発散し、国際交流もしながら万事うまくいくことを願っている。

著者



関口 秀樹

1997年入社。ハイドロリックコンポーネンツ事業本部営業統轄部専任課長。相模工場油機技術部第一設計室、管理部原価企画課、KHIZ駐在、KIMZ駐在を経て現職。